

# 19世紀日本の知の潮流

—— 江戸後期～明治初期の百科事典、博物学、博覧会 ——

伊藤 真実子

## 1. はじめに

明治維新の後、文明開化という言葉で近代化＝西洋化がおしすすめられた。とりわけ明治初期は、「御一新」と言う言葉が流行したように、変化、新しさが流行した時代でもあった。この「新しさ」とは、近代化＝西洋化のことであり、異文化の導入、受容であった。西洋を手本とした近代化への流れは、明治10、20年代に入ると完成した。完成にともない、その反動としての国粹化、保守、前近代への憧憬などもあったとはいえ、近代化、すなわち西洋を手本とした富国強兵、殖産興業政策、その成果としての欧米諸国と肩を並べる一等国となることは、ゆるぎない国是であり、国家目標であった。しかし、近代化へとすすむ道も西洋化の道一本ではなく、そこにいたる過程、すなわち幕末から明治0年代にかけては、まださまざまな価値が混在した時代であり、選択肢が複数ある時代であった。

日本の歴史をみると、他国の文化、思想、学問の受容は、明治に入って突如始まったわけではなく、中国からの文化の流入と受容という長い歴史がある。また、御一新で、前の時代にあったものがすべて否定、抹消されたわけでもない。

日本の百科事典は、勤子内親王が源順に、漢籍を読む際の手引書として漢字、中国文化などの解説書の編纂を命じて作成させた『倭名類聚抄』(934〔承永4〕年ごろ成立)にはじまる。すなわち漢字、漢籍など中国の文化の翻訳から日本の百科事典がはじまったといえよう。この本は、最初の日本語の辞典でもあるが、当時の生活文化解説、地名、地理などを含むその内容からみて百科事典と言える。百科事典が多く編纂されたのは江戸時代であるが、『和漢三才図会』、『大和本草』という題名からもわかるように、その多くは、中国の類書、本草書の和刻であり、さらにそれを元にして多様な日本版の百科事典が編纂された。江戸後期になると、幕府は西洋の百科事典の翻訳に着手する。そして明治維新後は、文部省が西洋の百科事典を翻訳、『百科全書』として出版するとともに、旧来の類従形式での日本の百科事典として『古事類苑』の編纂に着手した。

百科事典の研究は、辞典、事典の1つとして百科事典を捉えた言語史からの研究と、江戸時代に多くの百科事典が編纂された背景となった博物学の見地から、とりわけ科学史と美術史からの研究がある。たとえば、言語学においては、杉本つとむによる辞書、事典の歴史にかんする研究の蓄積がある。<sup>1</sup> 古代から編纂されてきた辞書・事典の編纂の経緯、编者についてはもち

<sup>1</sup> 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集6 辞書・事典の歴史Ⅰ』(八坂書房、1999年)、杉本つとむ『杉本つとむ著作選集7 辞書・事典の研究Ⅱ』(八坂書房、1999年)。

ろん、掲載されている言葉について詳細に研究がなされ、その中に『和漢三才図会』などの百科事典を対象とした研究がある。博物学からは、主に科学史からの研究が多く、西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本（上）（下）』<sup>2</sup>のように同時代の欧米との比較、山田慶兒らによる『東アジアの本草と博物学の世界（上）（下）』<sup>3</sup>のように東アジアにおける本草と博物学という研究がある。美術史では、今橋理子が『江戸の花鳥画—博物学をめぐる文化とその表象』<sup>4</sup>で、江戸の博物学と博物図譜を絵画史から論考した。今橋は、古来より描き続けられてきた「花鳥」画が、科学と芸術とが特に接近した江戸時代においていかなる様相を呈していたか<sup>5</sup>を、百科事典に描かれている図会も含め、当時流行していた浮世絵、大名図譜、絵本などと、それらに共通する絵師、画風から明らかにし、かつ花鳥画と、詩歌文芸あるいは博物学との関係を論考した。そのほか、2007年に印刷博物館で「百学連環—百科事典と博物図譜の饗宴」<sup>6</sup>という展覧会があるなど、近年は、百科事典と博物学、博物図譜に関して注目があつまりつつある。本稿で扱う、『和漢三才図会』はもとより、『厚生新編』<sup>7</sup>、明治初期の『百科全書』<sup>8</sup>、『古事類苑』<sup>9</sup>に関する研究もあるとはいえ、これまでは、百科事典そのものというよりも、言語学史、博物学史のなかの要素の1つとして研究されてきた。

百科事典、分類という点、ミシェル・フーコーの『言葉と物』<sup>10</sup>が有名だが、ピーター・パークが百科事典について、「ある知識観を、さらにはある世界観（中世以来、世界はしばしば1冊の書物として記述された）を、表現あるいは具象化したもの」<sup>11</sup>と評しているように、百科事典とはある体系、秩序をともなう知である。百科事典の項目の選定、記述、説明の仕方、分類は、当時のその地域の社会、文化、価値観、世界観、慣習、思想、学問体系、流行などを反映したものである。また、百科事典の翻訳は、外国の学問、知識、情報の翻訳であり、異なる国、地域の文化の受容と翻訳を意味する。つまり百科事典の翻訳とは、単に言葉を訳すということだけではなく、外国の学問、知識、情報の翻訳、すなわち異なる国、地域の文化の受容と翻訳の問題である。

そこで本稿では、おもに江戸後期から明治初年を対象に、他の国・地域の思想、文化、学問の受容のありよう、それをふくめた当時の日本の知の潮流、世界観について、百科事典を中心に考察する。というのも、百科事典をある体系、秩序をともなう知と捉え、その項目立て、分

<sup>2</sup> 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本（上）』（紀伊国屋書店、1999年）、西村三郎『文明の中の博物学—西欧と日本（下）』（紀伊国屋書店、1999年）西村以外にも、荒俣宏『想像の地球旅行—荒俣宏の博物学入門』（角川書店、2003年）がある。

<sup>3</sup> 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界（上）』（思文閣出版、1995年）山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界（下）』（思文閣出版、1995年）、および山田慶兒編『物のイメージ・本草と博物学への招待』（朝日新聞社、1994年）。

<sup>4</sup> 今橋理子『江戸の花鳥画—博物学をめぐる文化とその表象』（スカイドア、1995年）。

<sup>5</sup> 同上、16、17頁。

<sup>6</sup> 印刷博物館『百学連環—百科事典と博物図譜の饗宴』（印刷博物館、2007年）。

<sup>7</sup> 杉本つとむ『江戸時代西洋百科事典『厚生新編』の研究』（雄山閣出版、1998年）。

<sup>8</sup> 福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』（風間書房、1968年）。

<sup>9</sup> 熊田淳美『三大編纂物 群書類従、古事類苑、国書総目録の出版文化史』（勉誠出版、2009年）。

<sup>10</sup> 渡辺一民訳、ミシェル・フーコー『言葉と物—人文科学の考古学』（新潮社、1974年）。

<sup>11</sup> 井山弘幸、城戸淳訳、ピーター・パーク『知識の社会史』（新曜社、2004年）、144頁。

類に着目することにより、異なる秩序が既存の秩序に受容される様相を捉えるのに適すると考えるからである。事典から日本の思想史、文化史を考察する研究として、大隅和雄『事典の語る日本の歴史』<sup>12</sup>があるが、本稿では、百科事典の特性をいかしながら、かつ江戸後期から幕末、明治初期を続けてみることで、多様な価値が混在する時代の様相を考察する。

また、百科事典の流行の背景にあった博物学と、そこから派生した薬品会、博覧会にも言及する。対象は、基本的には百科事典とするが、本草書も含める。というのも、本草学は医薬のもととなる動植物を対象にした学問であり、江戸中期には自然界の産物すべてを対象とする博物学へと展開し、その書籍は自然界にあるものの書物化を意味するからである。

## 2. 江戸前期の百科事典、本草書

### 2-1. 『訓蒙図彙』

江戸後期から、幕末、明治初期にいたるまで編纂された百科事典の多くは、『和漢三才図会』や李時珍『本草綱目』の分類の影響を受けていた。江戸前期、中国の百科事典である類書、そして本草書が日本にもたらされると、次々に翻訳された。とりわけ明の時代に王圻が編纂した類書『三才図会』（1607年成稿、1637年刊行）が日本にもたらされると、それを手本として、『訓蒙図彙』、『和漢三才図会』のような百科事典が翻訳、編纂され、さらにそこから多種多様な百科事典が生み出された。『三才図会』の分類は、天地人の14部からなる。ここでの三才とは天・地・人、の3つから世界が構成されるという意味である。

京都の朱子学者である中村惕齋は、1666（寛文6）年に『訓蒙図彙』を完成させた。『三才図会』を参照にして17部の分類をたて、子供の啓蒙を目的として、絵図の横には漢名、和名が記された。『訓蒙図彙』ののち19世紀にいたるまで、このような絵図と名前を併記する百科事典が非常に流行し、ひとつのテーマに特化した図彙＝百科事典がつけられた。たとえば、『好色訓蒙図彙』（1686〔貞享3〕年）、『女用訓蒙図彙』（1687〔貞享4〕年）、『難字訓蒙図彙』（1687〔貞享4〕年）、『立花訓蒙図彙』（1696〔元禄9〕年）、『唐土訓蒙図彙』（1719〔享保4〕年）、『外科訓蒙図彙』（1772〔明和9〕年）、『謡訓蒙図彙』（1802〔享和2〕年）、『劇場訓蒙図彙』（1803〔享和3〕年）などである。

また『訓蒙図彙』は、初めての絵入り百科事典であるが、『人倫訓蒙図彙』（1690〔元禄3〕年）の分類を踏襲した風俗画（春画）もつくられるなど、百科事典以外の書籍にも、百科事典的要素「網羅的に蒐集して、分類する」ことの影響がみられる。

たとえば、上方の絵師、西川祐信は、風俗画（春画）『色ひいな形』（1711〔宝永8〕年）で、上巻では女帝・皇后・后・姫宮などを、下巻では遊女を対象に、その時代のあらゆる階層の女性を網羅し、描写した本を作成した。その1つ1つの絵には、儒者多田南嶺による起源、歴史、系譜、来歴などの解文が付されている。この2人は、『百人女郎品定』（1723〔享保8〕年）で

<sup>12</sup> 大隅和雄『事典の語る日本の歴史』（講談社、2008年）。

も、さまざまな職種の女性を身分の高位から下位へと網羅して描写したが、この本は『人倫訓蒙図彙』に見られる職種と分類法とを継承した本である<sup>13</sup>。

このように、網羅的にあらゆる職種の女性を描き、多田による解文が附されるというのが西川の画の特徴であるが<sup>14</sup>、西川に代表される上方風俗画が持っていた「典拠」と「網羅」というある種の実証主義的学問性格と、百科事典・類書編纂の流行の共通性については、すでに美術史からの指摘がある<sup>15</sup>。この背景には、主に上方を中心とした知識人、絵師、版元のつながりがあった。実際、中村は京の朱子学者であり、『和漢三才図会』を編纂した寺島良庵は、大阪城の御典医であった。

## 2-2. 『和漢三才図会』

寺島良庵『和漢三才図会』は、良庵が30年かけて翻訳、編纂し、1712（正徳2）年に出版された百科事典であり、105巻からなる。その項目は462にわたり、イロハ項目索引もあった。『和漢三才図会』は江戸時代を通じて広く用いられただけでなく、明治時代になっても縮刷版が出されるなど、ほぼ200年にわたり日本人の知識の源泉となった。『三才図会』『本草綱目』『五雜俎』、和書では『訓蒙図彙』を参考とし、絵図に、ものの和名、同義語、類語などの解説がつけられた。ただし分類は、『三才図会』が天地人であったが、天人地の順をとった。また、日本の地誌として、山、川、名所、神社仏閣やその由来、産物などが加えられるなど、日本に関する項目が増やされた。つまり、寺島は、原著から新たに分類を立て直すのではなく、順序は少し異なるものの三才の分類の上にたち、さらに日本に関する項目を増やすことで日本版としたのである。

『和漢三才図会』は、書写本としてではなく、最初から印刷本として出版された。この頃、百科事典のような大著も、活版で出版できるほど、出版技術が向上していたからである。そのため、百科事典のような大著も以前より安価になり、かつ重版も可能となり、それが百科事典の流行の要因の1つであった。実際に『和漢三才図会』は、明治に入っても縮刷版が出されており、200年にわたって重版されるほど人気を博し、『倭名類聚抄』も、1617（元和元）年に那波道円による活字本が校訂出版されると、17世紀中だけでも、1648、1659、1667、1671年に重版されるほどであった。また、百科事典のような大著だけでなく、辞書や百科事典の簡易版、一般庶民向けの日常生活に必要な各種の手引き書、農業技術書のような啓蒙書、実学書（農書など）が、続々と刊行された。

<sup>13</sup> この2年後、享保10（1725）年には、儒者伊藤東涯が類書『名物六帖』を編纂している。その分類は、天地人（天文・地理・人品・器財・動物・植物など13分類）であり、人の職種は身分の高位から下位へ、最終は遊女であった。

<sup>14</sup> 西川祐信は『艶本玉簾』（1719〔享保4〕年）でもほぼすべての遊女を網羅して描いた。

<sup>15</sup> 山本ゆかり『上方風俗画の研究—西川祐信・月岡雪鼎を中心に』（藝華書院、2010年）、26頁ほか、西川祐信の分類に関する指摘は、石上阿希氏の以下の報告を参照した。13th International Conference of EAJS 24-27 August 2011 Tallinn, Estonia Section 4: Visual and Performing Arts Subsection 4a: Visual Arts Panel: Shunga in its social and cultural context II ISHIGAMI Aki; How did Nishikawa Sukenobu's Shunpon Depict Various Castes? : A Case Study of /Iro hiinagata/

本草書については、幕末までその分類が踏襲されるほど影響力があったのが、李時珍『本草綱目』（全52巻）である。1596年に刊行されるや、日本にもたらされ、1607年には林羅山が徳川家康に献上した<sup>16</sup>。そして幾度も版を重ねただけでなく、1637（寛永14）年以後、和刻本が京都、江戸で刊行され、校正本、増補本、新校正本、和名入り本、和訳本など、中国をしのぐほどその翻訳本が刊行された。和刻本の代表的なものが、貝原益軒『大和本草』（1708〔宝永5〕年）である。

『本草綱目』の分類は、幕末ごろまで踏襲されるほど影響があった。しかし、益軒の『大和本草』は、大分類については『本草綱目』を踏襲しているものの、その下部にある項目は、『本草綱目』から、日本にないもの、曖昧なものを引いた772種に、他の本草書から（203種）と、日本の特産（358種）、オランダなどの渡来種（29種）を足した、1362種を掲載した<sup>17</sup>。フィールドワークを行っていた益軒らしく、日本産のものについては、和名と方言をくわえた。また益軒は、李『本草綱目』の分類（形状分類）に疑義をいただき、日本産の自然物によりふさわしい新分類法として、人間との関係、一たとえば、草について、その外見形状からではなく、薬草、花草、園草（花以外の園芸草）—に分類しなおした<sup>18</sup>。

この時代、本草書を和訳する際、天地人という大分類は、中国の本草書、とりわけ『本草綱目』を基本的には踏襲し、そこに日本産物、日本関連事項、和名を追加することで日本版とした。また、印刷技術の発達により、百科事典のような大著も刊行可能、入手も安易となり、百科事典の流行だけでなく、「網羅的に蒐集し、分類する」という百科事典的な要素を持つ書籍や、単一テーマへと細分化した百科事典、または簡易版など多様な百科事典が生み出されることとなった。そして、このようなことから百科事典および百科事典的な文化が流行するとともに、それを受容する基盤が形成されていった。

### 3. 江戸後期の百科事典、博物学の隆盛

#### 3-1. 江戸後期の百科事典と博物学

江戸後期の百科事典、博物学の隆盛の鍵は、徳川吉宗による享保の改革にあった。その1つに、国産薬物の開発と製品化がある。

当時、薬物、およびその原材料などを外国からの輸入にたよっていたため、銀が国外に流出し、財政を圧迫していた。そこで1721（享保5）年、吉宗は薬物、その原材料を国内産にすべく採薬使を全国に派遣し、国内各地に埋もれている薬剤を探查、採集し、輸入薬種に劣らぬ品質の国産薬種の開発を命じた。丹羽正伯、野呂元丈、田村藍水、植村政勝らの本草家らのほか、

<sup>16</sup> 林羅山は、和刻として『多識論』（1612〔慶長17〕年）を著した。

<sup>17</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学（上）』、121頁。

<sup>18</sup> 例えば、「草」については、李が山草、芳草、隰草、毒草、蔓草、水草、石草、苔、雑草と分けているのに対し、益軒は、菜蔬、薬草、民用草、花草、園草（花以外の園芸草）、蕈類、蔓草、芳草、水草、海草というように分けている。



市井の本草家、町医、薬種商にも命がくだった。

さらに1734（享保19）年、吉宗は諸国産物調査の開始を命じた。これは、各藩、天領、私領、寺社領に対し、薬草、石薬（鉱物薬）、鳥獣、魚介、昆虫にいたるまで、利用の有無にかかわらず、その領内における物産、自然物を調べて報告させるもので、物産学と殖産興業とつなげようと考えた吉宗の策である。また、加賀藩前田綱紀の命を受けた稲生若水がおこなった日本各地の産物を網羅した『庶物類纂』編纂の中断を惜しんだ吉宗が、丹羽正伯に命じて完成させるべく、その資料収集のために実施したのもであった。この産物調査は、本草学の対象、すなわち薬の原料とならない自然物、天然産物へも関心を開かせ、さらには、文献考証中心であった本草学を、現地調査、さらに方言も採録する方向へ開かせ、本草学の博物学化をもたらした。つまり、西村三郎も指摘しているように、本草学と物産学が結びつき、本草学が博物学化したのである<sup>19</sup>。

また、産物調査は、図会の写実性の向上をもたらした。さらに、同時期には、浮世絵などの色絵の技術向上もあり、この時代は大名から庶民にいたるまで、多様な図譜、絵本が流行した。

たとえば、諸国産物調査の実施は、領内はもとより、広く国内の産物、とりわけ動植物などの自然物に格別の関心を向ける大名があらわれ、宝暦（1751～1763）年間には、大名図譜が流行した。熊本藩主細川重賢、讃岐藩主松平頼恭、秋田藩主佐竹義敦に代表されるが<sup>20</sup>、彼らは家臣に動植物を集めさせ、お抱えの絵師に命じて博物図を作成させたり、またみずから草花を栽培、昆虫を飼育し、その生育や変態の模様を観察して、図譜を作成した。このようなことから、実物について正確に描写する態度「写生」が尊ばれるようになった<sup>21</sup>。

庶民のなかでは、俳句による動植物を良く知る必要性から、俳句と図会が合体した絵入り俳書が流行し<sup>22</sup>、さらには〇〇づくし（魚づくしなど）など、動植物などの絵図の部分だけの浮世絵、絵本も流行した<sup>23</sup>。まさに「づくし」との題名があらわしているように、これらの図会においても、網羅的に蒐集するという百科事典的要素を見ることができる。

また、産物調査は、それまでの本草学が文献考証中心であったのにたいし、実際の採集による考証を中心とする博物学、さらには、方言の採録へとつながっていった。

19世紀にはいると、江戸時代最大の本草書、小野蘭山『本草綱目啓蒙』が1803（享和3）～1806（文化3）年にかけて出版された。初版本は48巻、27冊におよび、5000項目が収録され、分類は、李時珍『本草綱目』に準拠するものであった。その特徴は、和名、方言の表示が主であり、さらには古語、古歌も含まれていることである。とりわけ方言は、北海道から琉球まで全国方言を網羅し、多いものは1つの名称に50以上の方言が列挙されているほどである<sup>24</sup>。つ

<sup>19</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学（上）』、132頁。

<sup>20</sup> 今橋理子「科学と芸術、そして俳諧文学—江戸博物学の世紀」（前掲 印刷博物館『百学連環—百科事典と博物図譜の饗宴』）、109–112頁。

<sup>21</sup> 前掲 今橋理子『江戸の花鳥画』、109–114頁、および芳賀徹『平賀源内』（朝日新聞社、1981年）、29–33頁。

<sup>22</sup> 前掲 今橋理子「科学と芸術、そして俳諧文学」、112–115頁。

<sup>23</sup> 同上 310–328頁。

<sup>24</sup> 前掲 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集7 辞書・事典の研究Ⅱ』、179頁。

まり『本草綱目啓蒙』は日本名、方言の力点が大であり、蘭山の関心がここにあった。

フィールドワークを重視していた小野蘭山ゆえ、多様な方言を収録したのであろう。加えて、この時代に出版され始めた方言辞典の存在が、各地の方言を収集することを可能とした。

当時、流行していた俳句は、和歌と異なり、雅語、和語以外のことばを使用する。とりわけ17世紀後半以降に流行した俳句の前句付は、五七五（長句）・七七（短句）の七七を出題、長句をあつめ、点をつけて競技するというものである。出品者は、取次所（連）から興行元をつうじて、点者に送る。したがって、江戸に居住する点者（俳諧師）のもとに全国から方言が集まってくることとなり、俳諧師による「方言辞典」が編纂された<sup>25</sup>。代表的なものに、越谷吾山『物類称呼』（1775〔安永4〕年）、小林一茶『方言雑集』がある。

また、蘭山『本草綱目啓蒙』にも古語が収録されていたが、幕末には、畔田翠山（源伴存）が『古名録』（85巻24部、86類）を出版した。畔田翠山は、紀州の本草学者で、『本草綱目』の和刻本『綱目注疏』も著している。『古名録』は分類、項目を『本草綱目』にならい、慶長以前のもとその名前を日中の過去の事典、辞典にもとめた。それぞれのもの、その名前の語源について、引用は『和名類聚抄』『新撰字鏡』『下学集』『塵添 囊鈔』『万葉集』『日本書紀』『吾妻鏡』『明月記』『平家物語』『本草綱目』『本草和名』、中国では、『字典』『爾雅』『正字通』『物理小識』『天工開物』などにおよんだ<sup>26</sup>。

方言、古語などの採録は、日本における多様な言い方による「もの」の説明であるが、これは、収録する「もの」が増えるのではなく、方言、古語による「ことば」が増えることで百科事典の充実がはかられたといえよう。とはいえ、薬物を扱う本草書に方言が記載されるのは、薬物の取り扱い上の危険性からも必然であるが、古語でもって動植物、鉱物といった自然界を説明するのは、本草学本来の目的からは、はずれる。本草書が類聚形式（文献考証）の記述様式であったため、古い言葉が記載されることは、これまでの本草書、類書にもあったが、『古名録』では古語の表記が主である。これは、江戸後期から幕末にかけての、国学の隆盛が背景にあり、雅語、古語に関する研究の成果として雅語、古語辞典が編纂されており、それらを参照にしたからであろう。しかし、この日本古来の言葉による本草書、すなわち古語で自然界、世界を表現するという表現もまた、当時の国学の隆盛の一形態であった。

### 3-2. 薬品会と西洋百科事典の翻訳

1720（享保5）年、徳川吉宗が洋書解禁政策をとると、オランダ商館経由で、医学書などが入ってきた。幕府でも、野呂元丈が紅葉山文庫の西洋蔵書ドドネウス『草木誌』について、オランダ商館長にただした。1741（寛保元）～1750（寛延3）年まで通算9回におよぶ質疑応答報告書が『阿蘭陀本草和解』（8冊）である。これは、質疑応答が9回という限られた機会であっ

<sup>25</sup> 前掲 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集7 辞書・事典の研究Ⅱ』、75-77頁、および今橋理子『江戸の動物画—近世美術と文化の考古学』（東京大学出版会、2004年）、130、131頁。

<sup>26</sup> 前掲 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集7 辞書・事典の研究Ⅱ』、187-191頁。

たことと、当時の通詞の技量などから、原著から必要な部分のみの翻訳となった。

また、徳川吉宗は、鎖国状況下ではあるが、長崎を通じて多くの外国産の動植物を輸入し、土着を試みた。その代表的なものが、朝鮮人参の国産化である。この外国産の珍しい動植物の輸入が、後に物産会へと展開した。

この当時、本草家、医師、薬種商人などが手元の薬物・薬剤から珍奇なものや疑問のあるものを持ち寄って展示し、その真贋や名称をめぐる質疑応答、情報交換をする薬品会が本草家の間で開催されていた。やがて持ち寄られるものが、薬草などよりも、珍しい自然物へとなり、薬品会からより広い範囲を対象とする物産会へ変わっていった。

なかでも、物産会へとつながる薬品会を開いたのが平賀源内である。源内は、1756（宝暦6）年3月に讃岐を出たあとに、大阪で薬品会を主催していた戸田旭山のもとを訪れ、さらに江戸で田村藍水に弟子入りしたのち、薬品会を提案した。実際に、源内は、1757（宝暦7）年からほぼ毎年1度ずつ、薬品会を計5回開催した<sup>27</sup>。

その第5回が、東都薬品会（1762〔宝暦12〕年）で、閏4月10日（旧暦）湯島天神前の京屋で開かれた。約1300余種の品が展示されたが、うち藍水と源内の出品が100種、これまでの4回合わせても700数種であったことから、その規模の大きさがうかがえる。これほど多くの展示品が並ぶこととなったのは、出品物を全国から集めるべく、源内が公募形式をとったからである。源内は前年の冬に、漢文、和文からなる開催趣意、出品手続きそのほかをしるした大判の引札を刷り、全国数十ヶ国で配布した<sup>28</sup>。その集積方法は、出品者は最寄りの諸国産物取次所（25ヶ所<sup>29</sup>）へ持ち寄り、そこから江戸、京、大阪の三都の請取所におくられ、請取所から源内へと送られる、というものであった。品物は、会の終了後、同じ経路をたどって出品者に返送され、運送費は往復とも主催者が負担した。取次所となったのは、諸国の本草家、薬種商で、請取所は、京、大阪、江戸の名のある薬種問屋であった<sup>30</sup>。このころまでに、全国の本草関係者、愛好者ネットワークが形成されていたからこそ、源内の薬品会への全国からの出品が可能であった<sup>31</sup>。この方法を可能にしたのは、前述した俳諧の前付付にみられるような、出品者から、取次所（連）を経て興行元（点者）に渡るというようなネットワークが、さまざまな趣味、連の中で形成されていたからであり、それを源内が参考にしたのであった<sup>32</sup>。

第5回東都薬品会は、薬品会と銘打たれているが、出品物を自然の産物全領域に開放しており、その内容は、物産会であった。また1763（宝暦13）年7月、薬品会の出品目録『物類品隣』

<sup>27</sup> 第1回 1757（宝暦7） 開催地：湯島／会主：田村藍水 180種

第2回 1758（宝暦8） 開催地：神田／会主：田村藍水 231種

第3回 1759（宝暦9） 開催地：本郷湯島／会主：田村藍水、平賀源内 213種

第4回 1760（宝暦10） 開催地：市ヶ谷／会主：松田長元（田村門下）

<sup>28</sup> 平賀源内先生顕彰会編『平賀源内全集（下）』（平賀源内顕彰会、1934年）、1501、1502頁。

<sup>29</sup> 長崎（2か所）、近江、摂津、南都、河内、大和、播磨（2か所）、紀伊、（2か所）、駿河、美濃、伊豆、尾張、鎌倉、讃岐（2か所）、下総、下野（2か所）、越中、信濃、武蔵、遠江。同上 1504頁。

<sup>30</sup> 同上

<sup>31</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学（上）』、138-140頁、および前掲 芳賀徹『平賀源内』、105-128頁。

<sup>32</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学（上）』、135頁。



(全6巻)を刊行した。李時珍『本草綱目』の分類を踏襲し、360種を掲載、それぞれに和名、漢名、あるいはオランダ名、方言、形状、性質、効用、用法、産地などが記述してある。ただし、各部門にわたり同じ数が掲載される、というわけではなく、例えば、水部は薔薇露のみであった。また、日本産のものに限らず、外国産は40種ほど、例えば、草部では、サフラン、ローズマリーが、葉部ではパセリなど、木部にはコルク、鱗部はワニの一種(カイマン)が収録された。そして、日本産、中国産のものにも、オランダ語名の呼称が掲載された。水部が薔薇露のみ、ということからも、全国から珍しいものを集めたいという源内の「めずらしさ」への着目がかがえる。源内は、大分類は漢書、伝統的分類を踏襲しつつも、その下部一モノとモノとの体系だった連関は考慮していなかった。また日本産と西洋産の類似、対比、差異もない。このように、体系だった連関が考慮されなかったのは、源内の分類基準が「例外」と扱われるような「めずらしいもの」であったからである。

このように薬効や、同定作業を中心とした薬品会から、自然物、珍しいものを中心とする物産会へとその内容がかわっていくとともに、この種の展示会が各地で開かれるようになった。それは、寺門静軒が『江戸繁盛記』(1832〔天保3〕～1836〔天保7〕年に刊行)で、「このころ江戸にはやるもの」の1つに薬品会をあげるほどであった。

1781(天明元)年以降、江戸では多紀氏の私設医学校(躋寿館)で毎年のように物産会が開催された。1791(寛政3)年に医学館が幕府直轄となった後も会場となり、官営の物産会が開かれた。

田村西湖とその門人たちが中心となって開催し、医学館の所蔵品と教官、医官の所蔵品、さらには館外からも借りて展示品をそろえ、会を一般に開放した。会は、混雑を防ぐためにあらかじめ切符を発行(切符は無料)するほど人気を博し、当日は医学館の生徒たちが展示品のかたわらにたち、「手を触れるべからず」と叫んでいたほどであった。開会中(2日間)は、医学館は休み(講堂など館の主な建物はみな陳列場)獣の毛皮、両頭蛇などが展示された<sup>33</sup>。

医学館以外でも、毎月3と8の日に岩崎常正、3の日に阿倍喜任、16の日に福井春水が、それぞれ本草会、薬品会を開催した。天保期には江戸詰めの大名や旗本を中心とした博物同好会「楮鞭会」(顧問に栗本丹洲(幕府医官、藍水次男))が結成され、毎月定例の会を開き、自慢の品、疑問の品を持ち寄り検討した<sup>34</sup>。

京都では、小野蘭山門下の弟子たちが、1808(文化5)年から60年間にわたり、ほぼ毎年物産会を開催した。通算50回、のべ1800人以上の出品者、のべ2万2000点以上の点数にのぼり、出品者には伊藤圭介らもいた。大阪では、岩永文楨が、1835(天保6)年から毎年物産会を主催、尾張では、1831(天保2)年に藩の静観堂校舎を医学館と改称ののち、藩の医師、浅井紫山の指導のもと、毎年6月に薬品会が開催された<sup>35</sup>。しかしながら、やがて薬品会、物産会とは名ばかりに、神社や寺で縁日に興行される見世物のようになっていった。実際に見世物業者

<sup>33</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学(下)』、471頁。

<sup>34</sup> 同上 472-474頁。

<sup>35</sup> 同上 473頁。

(興行師)によって、薬品会、物産会を名乗る興行が全国津々浦々で催され、また寺社の祭礼、ご開帳の呼び物として、天然奇物の見世物が開催されるようになった。そのほか、異国から舶来した珍獣奇鳥などは、見世物興行師とともに全国を巡業したほか、天明・寛政のころには、両国、浅草広小路、上野山下、下谷広徳寺前、大阪天王寺などに店内で孔雀、鹿を飼い、博物標本や花木、盆栽、外国産植物の鉢植えなどを並べる茶屋として、「孔雀茶屋」「鹿茶屋」「珍物茶屋」「花物茶屋」「花鳥茶屋」などがかまえられ、にぎわった<sup>36</sup>。

18世紀後半から19世紀にかけて、西洋の博物学者が来日した。1775(安永5)年リンネの弟子ツェンペリー来日し(～1776年)、帰国後『日本植物誌』を上梓した。1823(文政6)年には、シーボルトが来日した。彼に弟子入りした伊藤圭介が、シーボルト帰国の際に贈呈されたツェンペリー『日本植物誌』を翻訳したのが『泰正本草名疏』である。この本は、日本最初の近代植物分類学書であるが、原著のラテン語学名によるABC順のまま翻訳したため、その順番は日本語では意味をなさなかった。

1811(文化8)年5月、幕府天文方に和蘭書籍和解御用が設置され、ノエル・ショメル<sup>37</sup>『百科全書』の翻訳が開始された。ショメル『百科全書』は、1810(文化7)年、幕府に参内したオランダ商館長ドゥーフから買い上げたものである。

Noël Chomel en J.A. de Chalmot *Algemeen huishoudelijk-, natuur-, zedekundig-, en konstwoordenboek; vervattende veele middelen om zijn goed te vermeerderen, en zijne gezondheid te behouden*, Leyden, Joh. le Mair 1778

翻訳は、長崎のオランダ語通詞馬場貞由<sup>38</sup>、大槻玄沢の2人によって開始され、その後約30年間にわたり、宇田川玄真、榕庵、大槻玄幹、玄東、箕作阮甫、小関三英、湊長安、杉田立卿ら多くの通詞、儒学者、蘭学者が翻訳に取り組んだ。1845、46(弘化2、3)年頃、アルファベットV、すなわち、ほぼ最終巻まで翻訳が終わり、『厚生新編』102巻までできあがったが、未刊におわった<sup>39</sup>。

<sup>36</sup> 前掲 西村三郎『文明のなかの博物学(下)』、475頁、および前掲 西村三郎『文明のなかの博物学(上)』、179-184頁。

<sup>37</sup> ノエル＝ショメル(1633～1712) 僧院長、神学校校長、リヨンの主任司祭を歴任。1709年にリヨンでDictionnaire Economique という事典を刊行。当時は、パリ郊外ヴァンセンヌ教区長。教区の教導にあたるなか、日常生活に必要な知識を集めた実用的で平易な百科事典の必要性を鑑み、友人たちの協力を得て作成。Economique＝日常生活のため、実用のためという意味。当初は私家版であったが、1718年にパリ、リヨンで刊行、1732、40、67年に重版。1725年にロンドン、1727年ダブリン(英語版)、1743年アムステルダム(オランダ語版)、1750～57年にライプツヒ(ドイツ語版)そのほかスペイン語版もあり、1780年代には日本に(オランダ語版)。オランダ語訳は、2巻本、7巻本、8巻本、16巻本、18巻本あり。翻訳底本は8巻本(1778年刊行)。

<sup>38</sup> 馬場貞由(1787[天明7]～1822[文政5])、長崎蘭通詞。蘭、仏、英、露、羅、満などの諸外国語に通じていた。

<sup>39</sup> 翻訳書の所蔵の経過：天文方→開成所→駿府学問所/沼津兵学校→静岡師範学校→葵文庫(1924[大正13]年、70巻)→静岡県立中央図書館書庫(32巻)。この70巻と32巻で現存102巻。

その訳書は、『厚生新編』と名づけられた。馬場による「訳編初稿大意」に、「ホイスハウデレーキ（筆注；ホイスハウデレーキ・ウワールドブック／Huishoudelijk Woordenboek / Household Dictionary）という辞を訳すれば、人各家職を務め、それぞれの生産を計り、修めらるべき云々という語義なり。これに漢語をあてれば、厚生ともいう義なるべし<sup>40</sup>」とあるように、家庭用百科事典という意味である。当初から刊行を前提に読み手を広く設定し、その啓蒙の意図を「天下に公けに布かせ給ひ、不学文盲なる野夫工職の輩に至るまで、遍くこれを読み能くこれを理會し、其用を利せしめんとなれば和解文法通俗平和を専らとすべし<sup>41</sup>」と説いた。

シヨメルの『百科全書』はABC順であったため、「初巻より字音の順次に従ひてこれを訳すべし。其区分類聚は総巻全備の日に在るべしとなり<sup>42</sup>」というように、訳稿が完成したおりに、再度分類を立てる予定であった。「訳編初稿大意」によるとその分類は、予定では天地人の9部（天文・地土、生殖部、鳥獸、鉱物、人身、医薬、食物、産業・技芸、脂液部）であった。記述様式は、項目の翻訳につづき、類書と同じように文献考証による長い按文、説文が付けられた。翻訳にあたったのが、通詞と、蘭学者兼儒学者であったからである。それゆえ、項目の翻訳につづき、中国の類書、さらには、和書『倭名類聚抄』などからの引用、記述がつづいた。

ほぼ最終段階まで翻訳されていたにもかかわらず、なぜ未刊に終わったのであろうか。その理由は、当時の政治状況において、外交問題が最重要課題となり、それにともない1855（安政2）年には、蕃書和解御用掛を母体に洋学所が神田一ツ橋に開設（その後1866〔安政3〕年に蕃書調所と改称）され、外国事情の調査、外交文書や洋書の翻訳のみならず、洋学校での授業などのため通詞や学者が忙殺をきわめたからであった。

## 4. 明治初期の百科事典、博覧会

### 4-1. 明治初期の百科事典

明治維新後、新政府の文部省翻訳課長であった箕作麟祥の主導により、西洋の百科事典の全訳が始められた。W.Chambers and R.Chambers, *Information for the People*, London, 1857<sup>43</sup>の翻訳、文部省編『百科全書』（1873～1884年）である。ただし、全訳は年月と費用がかかるので、必要度が高く急を要する項目を選んで出版された。記述形態は原書の項目の翻訳のみで、類聚的な按文が加えられることはなく、1873（明治6）年から1884（明治17）年にかけて、全90編が刊行された。この翻訳版が刊行される前年、1872（明治5）年に、文部省学制が公布されていることもあり、文部省が学校政策の一環として翻訳を開始したものであった。西洋の百科

<sup>40</sup> 「訳編初稿大意」前掲 杉本つとむ『江戸時代西洋百科事典『厚生新編』の研究』、119頁。

<sup>41</sup> 同上 121頁。

<sup>42</sup> 同上。

<sup>43</sup> William Chambers and Robert Chambers, *Chambers's information for the people*, London, 1857 は、日本でもユーリカ・プレスより2005年に復刊された（2巻本）。松永俊男「チェンバース『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」が別冊日本版解説としてある。

事典の翻訳がすすめられる一方、1879（明治12）3月8日、文部大書記官西村茂樹は文部大輔田中不二麻呂（当時文部卿は空席）に宛てて「古事類苑編纂の儀伺」を建議した。

文運の開くるに従ひて、類聚の書なかるべからざるは自然の勢いにして、支那には宋の太宗の時、太平御覧、文苑英華、冊府元龜の三大類書あり、清の乾隆帝の時、淵鑑類函の緒あり、皆国君の御纂にして、蒐輯極めて該博なり。西国には一千二百年の頃、亜刺比亞の学士「アビユル、ハリユース」、始めて學術の語を輯録して、類聚の書を作り、夫より諸国に於て、此種の書を編輯する者、日々益々多く、近年に至り、仏蘭西、英吉利の學術の類聚書（エンサイクロペヂア）天下に名あり<sup>44</sup>。

まず、中国に類書があり、アラビアに類聚があり、フランス、イギリスにエンサイクロペディアがあることを述べる。そして、以下のように、類聚が必要な理由を続けた。

本邦の文運は早く開けたれども、類聚の書は至て乏しく、前に菅原家の類聚国史あり、後に水戸藩の礼儀類点あれども、一は国史のみに限り、一は礼儀のみに限れるを以て、普く諸学の用を為すこと能はず。寺島良安の和漢三才図会あれども、和漢の事を雑引きて、其中頗る無稽の説雑れり。故を以て今日に方り、本邦の古事旧典を求めんとするには、盡く数千巻の書を翻へして、暗索するに非ざれば、之を得ること能はず。支那欧米の事は遠しと雖も、類書あるを以て、之を尋ぬること太だ易く、本邦の事は近しと雖も、類書なきを以て、之を尋ぬる事、太だ難し。然れば今日の如き、人智を開き、文華を盛にせんとする時に当り、類聚書の編纂は、決して已むこと能はざる者なるべし<sup>45</sup>

これまでも、日本で類書が編纂されたが、日本のことを調べるにはどれも十分ではなく、数千巻の書物を探さなければならない。中国や欧米のようなものを、今、編纂するのは難しいが、類書の形式であれば、編纂が可能である、と述べる。この建議に加え、西村は、「今日は本邦の学問猶幼稚にして、西洋の如き大辞典を作るのを得ること能はず、依って姑く支那の類書に擬して一大類書を作りて今日の急に応じ<sup>46</sup>」と述べているように、現状では西洋の百科事典をつくる能力がないことから、従来の文献考証学にとった類聚様式の記述による日本の類書を編纂する旨を上申した。そして、名称を『古事類苑』とし、対象とする時代を神代から幕府崩壊まで、部門は『太平御覧』『淵鑑類函』『和漢三才図会』を参考に、漢文、そして和文で記述することなどを建議した。当時、西村は文部省で教科用参考図書の編集にあたり、チェンバース『百科全書』の翻訳では「天文学」を担当していた。この経験から日本の百科事

<sup>44</sup> 「古事類苑編纂事歴」『古事類苑 総目録・索引』（神宮司庁、1914年）、2頁。

<sup>45</sup> 同上 2、3頁。

<sup>46</sup> 西村茂樹「往時録」『西村茂樹全集第三巻』（思文閣、1967年）、634頁。



典の必要性の急務を感じ、建議したのであろう。

田中文部大輔が西村の建議を採択し、1879（明治12）年5月より『古事類苑』の編纂が開始された。30部門<sup>47</sup>がたてられ、小中村清矩、榊原芳野、那珂通高ら国学者が編纂にあたった。その後、松岡明義、佐藤誠実らに加わったが、1885（明治18）年、内閣制度発足にともなう官制改革により、編纂事業は中止された。以前にも、事業が遅々として進まないことに関し、小中村、重野安繹らから編纂方法の変更についての意見がだされるなどあった中、中止すべき事業として、内閣制度発足の機会に中止されたのであろう<sup>48</sup>。しかし、1年後の1886（明治19）年、森有礼文相が東京学士会院に事業の移管と再開を命じた（学士院会員でもある小中村が編集委員長を担当）。しかし、1890（明治23）年に皇典講究所へと移管したものの、財政問題は常にあり、1895（明治28）年に神宮司庁に事業が移管した。神宮司庁は、東京に古事類苑編纂事務所を設置して事業を継続し、1907（明治40）年に編纂が終了<sup>49</sup>、1000巻に及ぶ（和装本350冊、洋装本50冊）『古事類苑』が完成した。

#### 4-2. 幕末、明治初期の博覧会

1861（文久元）年4月、勝麟太郎が古賀謹一郎とともに、蕃書調所に物産学の設置を建議し、9月、物産方（学）が設立され、伊藤圭介、田中芳男が出仕した。物産学を、将来盛んとなるべき貿易のためにも、国内の物産の状況の把握のため、全国から物産を取り寄せて調査<sup>50</sup>する学問と位置づけ、殖産興業をもって国を富ませる、という考え方に基づいていた。

田中芳男は、虫捕御用として1866（慶応2）年3～7月にかけて他の6名とともに昆虫を採集し（相模、伊豆半島、駿河、下総）標本を制作、1867（慶応3）年パリ万国博覧会へ標本を持参し展示した<sup>51</sup>。田中は、甲殻類や蜘蛛の標本も持参したが、その際には薬効重視の本草学の視点から、ヨーロッパで知られていない希少種を選別し、持参した。標本は万博で銀賞を受賞し、その後パリの自然史博物館におさめられた<sup>52</sup>。その後田中は、1873（明治6）年ウィーン万博はもとより日本の万博参加の中心人物として活躍した。

明治政府は、殖産興業の観点から第1回内国勸業博覧会を1877（明治10）年に開催する。しかしそれ以前、明治0年代には、石井研堂『明治事物起源』に「明治四五年頃より十年頃までは、都鄙ともに、博覧会の大流行にて、説教・斬髪・学校建設・馬車・人力車などと共に、文明開化の要素として、一時其盛を極めたり<sup>53</sup>」と評されるほど日本各地でさまざまな博覧会が開かれた。（資料1）

<sup>47</sup> 『古事類苑』の部門：天、歳時、地、神祇、帝王、官位、封録、政治、法律、泉貨、称量、外交、兵事、武技、方技、宗教、文学、礼式、楽舞、人、姓名、産業、服飾、飲食、居処、器用、遊戯、動物、植物、金石。

<sup>48</sup> 前掲 熊田淳美 『三大編纂物 群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史』、91頁。

<sup>49</sup> 同上 92、93頁。

<sup>50</sup> 東京国立博物館編 『東京国立博物館百年史』（東京国立博物館、1973年）20頁。

<sup>51</sup> 同上 16、17頁。

<sup>52</sup> 西野嘉章、クリスティアン・ボラック編 『維新とフランス—日仏学術交流の黎明』（東京大学出版会、2009年）、17頁。

<sup>53</sup> 石井研堂『明治事物起源』（春陽堂、1926年）、1028頁。

最初の博覧会は、1871（明治4）年11月22日から1ヶ月間 三井高福寺主催、京都西本願寺で開かれた京都博覧会で、約1万人の入場者であった。東京遷都後の京都の沈滞した空気を盛り返そうとして開催され、その後、1928（昭和3）年明治文化博覧会（開催60周年記念）まで、ほぼ毎年開かれた。明治初期に開かれた博覧会の多くが神社仏閣、御所、城を会場としたのは、江戸時代に開かれていた物産会、御開帳などからの連続性のゆえである。博覧会の名称の定着化は、この時代の大ベストセラー、福沢諭吉『西洋事情』で博覧会が紹介されたことによる。

1871年5月14日（旧暦）から7日間にわたり、東京九段招魂社にて大学南校主催の物産会が開催された。名称は物産会であるが、計画段階での名称は博覧会であった。出品分類は、鉱物、植物、動物、西洋からの輸出品として測量究理器械、内外医科器械、陶器（国内外）、古物、雑部である。この分類は、自然物、西洋からの器械、人工物という大分類のもと、たてられたのであろう。出品物の多くは、鉱物、植物、動物の自然物で、田中芳男、伊藤圭介からの出品であった<sup>54</sup>。

閉会直後の5月23日（旧暦）、太政官布告として「古器旧物類保存方」（太政官第251号）が出された。

古器旧物の類は、古今時勢之変遷、制度風俗の沿革を考証し候為め、其裨益不少候処、自然厭旧競新候流弊より追々遺失毀壞に及候ては、実に可愛惜事に候条、各地方に於て、歴世蔵貯致居候古器旧物類、別紙品目之通細大を不論厚く保全可致事。

但品目並に所蔵人名委細記載し、其官庁より可差出事<sup>55</sup>。

冒頭、古器旧物の類を、歴史を語るものとしてその意義を強調しているが、これは当時の廃仏毀釈を憂慮してのものであった。「古器旧物類、別紙品目之通」とあるが、但し書きにつづいて、祭器の部（神祭に用いる楯矛其他諸器物等）、古玉宝石の部（曲玉、管玉、珊瑚、水晶等の類）、石弩雷斧の部（石弩、雷斧、霹靂礮、石劍、天狗の飯匙等）、古鏡古鈴の部（古鏡、古鈴等）、というように、古器旧物を別紙品目で31部にわけ、さらにその部の中で、細分化し、分類した<sup>56</sup>。この分類は、『和漢三才図会』と松平定信の『集古十種』の分類、そして江戸中期以来の大名、学者、好事家らによる古器旧物の調査、収集などの成果などを参考にたてられたとの指摘がある<sup>57</sup>。

また、「但し書き」として、各府県の古器旧物品目と所蔵先の目録の提出を求めているが、これは、1873年ウィーン万博への出品準備をもくしてのことであった。事実、冒頭の「古今時勢之変遷、制度風俗の沿革を考証し候」というように、日本の歴史、制度、風俗の沿革語るため

<sup>54</sup> 前掲 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』、32、33頁。

<sup>55</sup> 同上 39頁。

<sup>56</sup> 祭器、古玉宝石、石弩雷斧、古鏡古鈴、銅器、古瓦、武器、古書画、古書籍並古経文、扁額、楽器、鐘銘碑銘墨本、印章、文房諸具、農具、工匠器械、車輿、屋内諸具、布帛、衣服裝飾、皮革、貨幣、諸金製造器、陶磁器、漆器、度量権衡等、茶器香具花器。遊戯具、雛職等偶人並兒玩、古仏並仏具、化石の31部。

<sup>57</sup> 前掲 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』、39、40頁。

に古器旧物が必要と述べているが、ウィーン万博をはじめ、その後の万博でも、欧米諸国に日本を説明するために、書画、工芸品、美術品などとともに、日本に関するパンフレットや、歴史書が編纂され、使われた<sup>58</sup>。

1872年4月17日、湯島聖堂で文部省博物館主催の博覧会が開かれた。開催趣旨には、前年の古器旧物保存方を受け、知見の拡大と古器旧物展示が掲げられた。名古屋城の金のシャチホコ（雄）をはじめ、古鏡、書画骨董、化石剥製などが展示された。観覧にあたっては、文部省から「古器旧物に至ては、時世の推遷、制度の沿革を追徴す可き要物なるに因り…中略…周く之を羅列して世人の放観に供せんと欲す<sup>59</sup>」と布達されるように、古器旧物を中心とした博覧会であった。すなわち前年に布達された「古器旧物保全」の動きと密接に関係した、古器旧物保全を浸透させることが主眼となった博覧会であり、展示物も古器物が多く、前年の物産会で多数を占めた動植物、鉱物は少なかった。この機におろされた名古屋城の金のシャチホコ（雌）は、翌年開催されるウィーン万博に出品されるべく、輸送された。

1875（明治8）年、内務省に博覧会事務局と文部省の物産局が移管し、博覧会は内務省の管轄となった。その後、大久保利通内務卿は殖産興業政策の一環として内国勸業博覧会の開催を提唱する。1875年の内務省報告には、博覧会について、「今や各地、人民官設を待たすして、相競ふて開設するもの歳を逐ふて増加せり。…中略…其展列する所も徒らに古器断物に偏し、実用有益の物品に疎なるの景況を免かれざるものあり<sup>60</sup>」というように、古器旧物を多く展示するのは、博覧会の実用有益性から程遠いとある。そして1877（明治10）年に開かれた第1回内国勸業博覧会において、内務省は、出品者心得として「珍しき品物たりとも、都てかたわの鳥獸虫魚又は古代の瓦曲玉書画等の類は此会に出すへからず<sup>61</sup>」というように、珍しいものであっても、古器旧物、書画などの出品を禁止する旨を布達した。さらに、内務省が編纂した『明治十年内国勸業博覧会場案内』では、「徒に戯玩の場を設けて遊覧の具となすにあらざるなり<sup>62</sup>」として、博覧会は見世物興行のようなものではないことを表明する。これは、勸業博覧会と、それ以前の物産会（見世物）、博覧会などとの決別を意味する。前近代的なものの象徴として、見世物、御開帳、物産会、そして第1回勸業博以前に各地で開かれた博覧会を否定したわけである。

ただし内国勸業博覧会も、1903（明治36）年に開かれた第5回を数えるころには、娯楽要素を多分に含むようになった。場内には、ウォーターライダー、エレベーター、メリーゴーランド、大阪遊郭の芸子による踊り、夜間はイルミネーション、花火などが催され、博覧会で最も人気だったのは、「不思議館」でのアメリカ女優カーマン・セラの電気舞であった。（色と

<sup>58</sup> 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』（吉川弘文館、2008年）。

<sup>59</sup> 1872年3月22日（旧暦：明治5年2月24日）文部省番外『法令全書』。

<sup>60</sup> 1876年勸業寮第1回年報「博覧会の件」藤原正人編『明治前期産業発達史資料 別冊26（2）』（明治文献資料刊行会、1967年）、319、320頁。

<sup>61</sup> 「明治十年内国勸業博覧会出品者心得」（1876年8月9日、内務省布達甲第31号『法令全書』）。

<sup>62</sup> 内国勸業博覧会事務局『内国勸業博覧会場案内』前掲 藤原正人編『明治前期産業発達史資料 別冊26（2）』、29頁。

りどりの照明を浴びて、女優が踊るもの)つまり、本草家の薬種同定作業からはじまった薬品会が、物産会、ひいては御開帳とむすびついて見世物興行として娯楽化していったように、勸業博覧会も同じ道をたどったのであった。

## 5. おわりに

江戸時代の百科事典は、中国の類書を手本にし、その和刻からはじまったが、さらに簡易版がでたり、細分化されたり、それに加えて「網羅的に蒐集して、分類する」という百科事典的な要素を含む多様な書籍、図会などが生み出された。これは、印刷技術の向上をはじめ、博物学、博物趣味の流行、図会の写実性の向上、浮世絵をはじめとした図会、絵本の人気、博物学とも関係する俳句の流行など、さまざまな要素がからみあつてのことであつた。

中国の類書、本草書を翻訳、受容する際には、日本の産物、日本の地誌、方言、古語などを採録することで日本版とした。同じ頃、隆盛をきわめた西洋の博物学では、より遠くへと珍しい動植物の採集へ向かい、その成果として百科事典の項目が増えていったが、鎖国下であつた日本は、方言や古語など言葉でもって百科事典の内容が増えていくとともに、吉宗の国産薬種の開発以降、品種改良、亜種の探索などにより、掲載される種類、項目が増えていった。

江戸後期になると、西洋の百科事典の翻訳を開始したが、海外の学問、知識を手本とするということでは中国の百科事典の翻訳と同じであつた。中国の分類基準「天地人」、とりわけ李時珍『本草綱目』の分類は、幕末の『古名録』、明治初期の『古事類苑』でも踏襲された。これは漢学が正統性をもっていたことと、「漢字」が持つ特性ゆえ、その分類が日本でも有効に働いた、ということがある。一方、西洋の百科事典、博物書は、ABC順であつたことが、日本語では意味をなさなかつた。それゆえ、『厚生新編』では、翻訳の後、原著にはみられない分類がなされた。また、その記述方式においても、項目の翻訳に加えて、類書にみられる文献考証の書き方が引き続き踏襲され、『厚生新編』はその意味で、西洋と東洋の学問の折衷型といえる。

明治政府は、西洋の『百科全書』と古来の類従形式の『古事類苑』の両方の編纂を開始したが、『百科全書』が翻訳完了の順に刊行するなど、翻訳、刊行への積極性がみてとれる一方、『古事類苑』は、より困難な作業ではあるが、やがて政府事業から外れ、最後は伊勢神宮、神宮司庁が事業を担った。これは記述形式および、記述内容からみて、『古事類苑』は前近代のもの、と判断されたこともその一因であつた。

はじめに述べたように、百科事典は、その当時の世界観、すなわち万物による普遍の記述である。中国の類書、およびそれを起源とする日本の伝統的な百科事典の意味する普遍は、その対象範囲を中華思想の範囲、すなわち東アジアの漢字文化圏を普遍の及ぶ範囲と想定していた。一方、西洋の百科事典の想定する普遍とは、地域を限定しない、まさに全世界にわたる普遍であつた。そして、ここで言う西洋の普遍とは、近代資本主義、合理主義を背景にした普遍であり、この西洋の「普遍」という主張こそが、西洋と日本との距離や交流の歴史の乏しさに加えて、それまでの手本とした外国(中国)文化との差異、異質性を感じさせ、西洋化=近代



化の反動としての国粹化、保守、前近代への憧憬などを生み出すこととなった。

本草学は、その対象が薬種であるため、おのずと自然界にある動植物、鉱物がその対象であった。薬品会は、本草家のあいだでの「言葉と物」の同定作業として始まったが、やがて、めずらしいものを展示して楽しむ会、物産会へと展開した。明治初期の博覧会においても、当初は、動植物・鉱物が展示の中心であったが、古器旧物保存法の公布ともあいまって、古器旧物、書画などが展示の中心へと変わった。しかし殖産興業政策の一環として内国勸業博覧会が開催されることになると、展示の中心は最新の機械、道具へと変わった。展示物は、時代を経るごとに、自然界にあるものから、人間の制作物へと変わった。さらにのちには、展示される制作物も、古器旧物から、最新の機械、道具へと変わり、古器旧物、書画は、美術品として博物館に収蔵、展示されることとなった。博物館が過去を常設で展示する一方、内国勸業博覧会は、進歩、発展という未来を時限的に展示した。

内国勸業博覧会開催の当初、政府は、「見世物ではない」ことを明確化したが、回を重ねるごとに、娯楽要素が増えていった。しかしその娯楽は、以前のような、外国の珍しい動植物、珍品奇品ではなく、最新の技術や電気を使ったエレベーター、イルミネーションといったものであった。博覧会会場、建物も、明治初期は、神社仏閣、城などで開催されたが、勸業博覧会開催にあたり、上野、京都、天王寺で新たに会場が設営され、パビリオンが建設されたように、展示物を入れる建物自体も「今」を象徴するものとなった。

資料1 明治初期博覧会開催一覧

開催時期		名称	開催場所	主催者
1871 (M3)	10.10~11.11	京都博覧会	京都府 西本願寺	京都博覧会社
1872 (M4)	3.10~5.30	第1回京都博覧会	京都府 西本願寺、知恩寺、建仁寺	京都博覧会社
	3.10~4.30	湯島聖堂博覧会	東京都 湯島聖堂	文部省博物局
	5.16~5.29	額田博覧会	愛媛県 岡崎専福寺	
	5.20~6.10	和歌山博覧会	和歌山県 鷲森本願寺	
	6.10~7.10	広島博覧会	広島県 厳島千畳閣	広島県
	9.16~10.16	金沢博覧会	石川県 兼六園	加賀 金沢市
	1873 (M5)	3月~4月	金毘羅博覧会	香川県 金毘羅神社
1874 (M6)	3.13~6.10	第2回京都博覧会	京都御所、仙洞御所	京都博覧会社
	3.15~5.15	伊勢山田博覧会	度会郡山田	度会県丁神社庁
	3.15~3.30	茨城博覧会	茨城県	西高辻信巖、三木隆助
	4.15~7.31	山下御門内博覧会	山下御門内博物館	内務省博覧会事務局
	11.10~12.24	松本博覧会	松本城	松本博覧会社
	1874 (M6)	3.16~6.10	山下御門内博覧会	山下御門内博物館
1875 (M7)	4.1~6.8	第3回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
	5.1~6.10	名古屋勸業博覧会	東本願寺名古屋別院	愛知県下博覧会社
		奈良博覧会	東大寺大仏殿	
	6.1~7.4	新潟博覧会	白山神社	新潟県
	2.15	新吉原博覧会	江戸金瓶楼	依屋和助、泉屋忠兵衛
1876 (M8)	3.1~6.8	第4回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
	4.1~6.19	第1回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
	6.17~7.1	新潟博覧会	新潟	
	3.15~6.22	第5回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
1877 (M9)	3.15~6.25	第2回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
	4.1~6.10	堺県博覧会	堺、南宗寺	堺博物館
	4.15~6.25	宮城県博覧会	仙台、桜が丘公園	宮城県
	2.1~5.1	第3回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
1877 (M9)	3.10~6.22	第6回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
	4.10~6.8	堺博覧会	南宗寺	堺博物館
	5.15~6.15	第1回秋田博覧会	秋田、佐竹義純別邸	
	8.20~11.30	第1回内国勸業博覧会	上野公園	政府

---

◇

## Transforming Knowledge in Early Modern Japan — Encyclopedias, Natural History and Exhibitions —

Mamiko ITO

Japan has incorporated aspects of different civilizations for hundreds of years. Until recently, most cultural imports came from China. Japan adopted Chinese characters into its writing system, Confucianism into its philosophy, and the Chinese form of the Encyclopedia (Leishu). For many years, the Japanese encyclopedia took the form of an edited translation of a Chinese one, especially in the Seventeenth and the Eighteenth Century.

In 1637, “*the Sancai Tuhui*” (三才図会) was edited by Wang Qi in China. This work was quickly transmitted to Japan and translated within thirty years as “*Wakan Sansei Zue*” (和漢三才図会) by Terashima Ryoan, in 1713. This Japanese encyclopedia was popular. The price was not so high since it was a printed book and not a hand-written manuscript, and the pictures made it easy to understand. Because of this, it was reprinted several times over 200 years. Why did these encyclopedias enjoy such popularity? One reason was the progress of print techniques that lowered prices, and another factor was the popularity of natural history.

Natural history has had a wide appeal not only in Europe but also in Asia in the 100 years from the mid-Eighteenth century. Because of “closed country,” Japan remained political stable. It allowed for a flourishing of culture and hobbies. One aspect of this was an interest in natural history. It spread not only among intellectuals and wealthy aristocrats, but also among the general public. With the popularity of natural history, many variations of the encyclopedia were edited, both digests (handbooks for daily use) and specialized ones.

Natural history became popular as a scholarly pursuit as well. Li Shizhen’s “*Bencao gangmu*” (本草綱目) was published in 1596, and was imported to Japan by 1604. The most famous translation of it in Japan was “*Yamato Honzo*” by Kaibara Ekiken. He picked included things found in Japan, and added a large number of animals, plants, and minerals to the original.

In the first half of the Eighteenth Century, the government adopted new policy: the development of domestic pharmacopeia. Therefore, new species or subspecies were sought. Scholars met to identify between things and names elaborated in books. In time, they brought rare articles together and organized exhibitions (薬品会). In 1757, scholars nationwide attended the exhibition in Edo, and if they could not come to Edo, it was possible to send items through the network of the pharmacies. This is the origin of the modern exhibition in Japan.

Around 1800 the Tokugawa government got a western encyclopedia from the chief of the Netherland's factory at Nagasaki. It was the first encyclopedia from Europe. After the Meiji Restoration, huge western knowledge flowed into Japan. The Meiji government worked on translating western encyclopedias. It brought not only new knowledge, but transformed the existing order of knowledge.

This paper will focus on the history of translation of encyclopedia in Japan. Encyclopedia was a mirror of culture, sense of value, custom, thought, idea, scholarship and trend at that age and at that country all over the world. Hence, in this paper, I argue how did the Japanese translate and incorporate another country's encyclopedia into her own country.